
真・恋姫無双～黒き鬼と姫達との邂逅～

燻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜黒き鬼と姫達との邂逅〜

【Nコード】

N9051Z

【作者名】

燼

【あらすじ】

幻魔神を倒し、

妖星を壊して、逝った。蒼鬼

そこで神から力をもらい。とある世界の人を救って欲しいと言われる。

さてはて、蒼鬼は、どうなるのやら!?

第一話「蒼鬼、神に会うとの事」(前書き)

駄文です。処女作です。恋姫の内容を全くしりませんので、こんな感じ?ですすめて行きます。ご了承ください。

第一話「蒼鬼、神に会うとの事」

「ここは？どこだ？確か最後に妖星を壊して、消えたはず……」

突然後ろから誰かの声が？聞こえてくる

「よう？気がついたか？俺はお前らで言う事の神だよろしくな？」

「よろしくな？じゃねえよ！ここは、いったいどこだ！」

と蒼鬼が聞く

「ここか？ここは、未練を残したものが、滞在する、あの世とこの世のまあ中間みたいなもんだ」

と、神が答える

「そうか……で？俺に何をして欲しいんだ？」

「察しがいいな！まああれだとりあえず力やるから、とある世界の人を救ってこい。あ、これお願いじゃなくて命令だからよろしく」

「ああわかったじゃ送ってくれ」

「聞き分けがいいな？まあその方がいいんだが……じゃ行つてこい。あ、力は向こうで、頭のなかで力と念じてくれ、出てくるから」

「分かったじゃな」

パチンと神が指を鳴らすと、蒼鬼の下に穴が開く

「へ？なああああ！？なんで、こんな送り方なんじゃー！」

さて、蒼鬼の新たな物語が、始まる

第一話「蒼鬼、神に会うとの事」(後書き)

こんな感じですが、どうでしょうか？出来たら感想を宜しくお願
いします。出来たら続きも、書いて行けたらいいなと思います。
誹謗中傷は、要りませんのでよろしくお願ひします。

第二話「蒼鬼、大地にたち、力を確認するとの事」(前書き)

2連続で投稿です。下手で、主人公の口調とか変わってるかもですが、出来たらスルーで、お願いします。

第二話「蒼鬼、大地にたち、力を確認するとの事」

「よし・・・ついた。穴からでた時あんなことがあったがまあいい。思い出したくもねえ・・・」

そして蒼鬼は、神から言われた事を、実践する。

「念じるんだつたな・・・いかにもあれだが、確認しねえとな・・・
・・・胡散臭いが」

念じると、始めにでてきたのは、蒼鬼が、母親からもらった大太刀
「これは、山河慟哭？まあ持ってみないとな・・・うお前生きて
持ってたのより軽い！さらに能力強化？なんだこれは・・・さらに、
鬼の籠手や、眼まで・・・自分の体も、軽いし。なにがしたいんだ
あの神は」

力を確認した蒼鬼、この後どうなるのやら!?

第二話「蒼鬼、大地にたち、力を確認するとの事」（後書き）

今回もこんな感じですが、どうでしょうか？出来たら感想を宜しく
願います。けど誹謗中傷は、要りませんのでよろしく願いま
す。

出来たらもうちょっと強くしてみたいです

第三話「蒼鬼、神と再び語るとの事」(前書き)

力を確認からの続きです。一応蒼鬼は、神の存在を、認識していますが、これは、曲がりなりにも、幻魔神という存在をみたがために、まあいいや？みたいな感じになっているがためです。まあご都合主義です。すいません

第三話「蒼鬼、神と再び語るとの事」

「さて、軽く確認したが、あまり使わない様にするか、鬼神化、皆から力をもらってやったものを、籠手を填めて姿を思い浮かべたら成れるなんて、異常過ぎるし、鬼の眼もそうだ、開眼したら、身体能力さらに上がるは、動体視力上がるは、で・・・まああまり使わない様にしよう」

と思っていたところ、突然蒼鬼の頭に言葉が、

「そうだなあまり使わないに、越したことはないが、大事な時は使えよ？」

「つつ！この声は、糞神！？いきなり声かけてきやがって、頭痛えじゃねえか！」

「なに、救って欲しい人の名を言うの忘れててな？」

「そういえば聞いて無かったな？その人の名は？」

そう蒼鬼が、聞くと？

「孫策という人物だ。まあまだまだ要るがな、」

と神が答えると、蒼鬼は。

「な！1人だけじゃないのかよ！？」

と驚きながら蒼鬼が、聞く

「あたりだ、誰が1人だけと言った。人とはいつたが人数は、指定してなかったらう？」

「うち！じゃあ誰なんだ？その人達は？」

「その人達は、まずは孫権と甘寧だな、盗賊に、襲われてるだろうから、宜しくな？」

「

「またかよ！？それ、まあいいけどさ、何処にいるんだ？」

「場所は、こっか

ら北だ、頭んなかに地図入れておくから頑張れよ？」

「あいよお！でまたさっきの頭痛くるわけ？」

「当たり前だ。じゃ今度こそ宜しくな？」

神が、蒼鬼の頭に数秒触れると、また蒼鬼は、頭を抱えながら身悶えた。

「あ、いい忘れてた、今のお前かなり身体能力強化してあるから、3日あれば、いけるぞ？まあ頑張れやちよと此処から4日だらよ？昼夜関係なかったら3日でつくわ。」

と言つと神は、今度こそその場から消え去つた

「あの、糞神があ……………」

第三話「蒼鬼、神と再び語るとの事」(後書き)

今回もこんな感じですが、どうでしょうか？出来たら感想を宜しく
願います。けど誹謗中傷は、要りませんので宜しく願います。
色々ご都合主義が、ありますが籠手とか、ご了承下さい。すい
ません

さて次は出来たら、孫権と甘寧と絡ませてみたいなと思います。出
来たらですが、

では、この辺でさようなら

第四話「蒼鬼、北へ全力で走るとの事」(前書き)

前回からの続きです。あ、誤字があつた箇所があつたので、少し修正しました。皆様からも、誤字脱字が、あれば言ってください直します。それから、八雲葵さん、ご指摘のコメントありがとうございます。出来るだけ頑張つて行こうと思いますので、宜しくお願ひします。では、前書きはこれくらいで、

第四話「蒼鬼、北へ全力で走るとの事」

「うう……やっと収まったか……あの糞神め……大分痛え
じゃねえか」

ぶつくさと文句を垂れる蒼鬼

「文句ばっかいてもはじまらねえ……行くか、あの糞神の口ぶ
りだと、もう襲われてるかも知れねえしな。地図も、さっきと同じ
要領で、やりや良いんだろっ」

と、頭のなかで、地図を思い浮かべながら念じる蒼鬼

「よし、出たみたいだな、このまま本当に北へまっすぐみたいだな、
じゃ急ぎますか!」

蒼鬼が足にめいっぱいの力を込めて走り出す

「うおお!?!こんなに体が軽いのか、まあいいさっさと行くとする
か!」

さてはて蒼鬼は、孫権と甘寧を助けるがため北をひた走るさて、ど
うなることやら

第四話「蒼鬼、北へ全力で走るとの事」(後書き)

すみません。なんか走り出すしかできませんでした。作者の文才のなさが原因です。すみません

次こそは、孫権と甘寧を出そうかなと思っています。がんばります。

出来たら感想下さい。誹謗中傷は、要りませんが、では、またー

第五話「蒼鬼、姫達との邂逅を成す?との事」(前書き)

遅れましたが、新年明けましておめでとございます今年もこの小説を宜しく願います。さつ続きです。とりあえずみてください。見るに絶えないと、思いますが、宜しく願います。

第五話「蒼鬼、姫達との邂逅を成す?との事」

蒼鬼が、ひた走り村へ向かっている頃

「つく!なんで、まだこんなに賊が!?あの時は、こんなに多い感じじゃなかったのに!?左、そのまま展開しつつ賊どもを蹴散らせ!

その時、私は、この村へ来たときのことを思い出していた。

side : 蓮華

行きなりの、挨拶すまない。

私は、姓は、孫名は、権字は、仲謀という

「あ、あの?蓮華様?どちらを向いて喋っていらっしやるんですか?」

この娘は、私の護衛。姓は、甘名は、寧字は興霸。真っ直ぐで、私より強く、あまり融通がきかなく私より、胸がすこしちい

ぶおん!と甘寧の剣が、孫権の横をかすめる。

「ひゃ!あぶないわね思春いきなり何するのよ」

「いえ...何か蓮華様から何か私に関して不穏なことを思われたような、気がして...」

「私が、そんなこと思ってないわよ?気のせいじゃないの?」

「そうですか・・・申し訳ございませんでした。」

「いえ? いいのよ(つく・・・やはり鋭いわね)」

「蓮華様・・・?」

「いえ? なんでもないわ・・・それより思春時間は、大丈夫かしら?」

「はい、雪蓮様からのご命令の、日輪が、蒼天の中央を差すときまで、後、半日以上もあります。間に合いますよ。」

「そう、なら大丈夫ね。ふうじゃあ次の村で少し休みましようか。このまま行っても構わないけれど、他の皆がね?」

「分かりました。それにちょうど村が!」

「どうしたの? 思春?」

「蓮華様、村から黒い煙が!」

「何!? では、助けに行くわよ!」

「御意・・・」

孫権達が、村へついた時には、そこは賊達に、村人達が、殺され、村を壊されている光景だった

「つく! 半分は、私と共に! もう半分は思春に!」

「蓮華様・・・御武運を」

「思春貴女もね・・・死んだら駄目よ？」

「は！それでは」

甘寧は、部隊の半分を連れ村の中へと勇んで行った
孫権は、行った甘寧を見届けると、剣を抜刀しこう言った

「この、村にいる賊どもを許すな！人とは思わず獣と思い殲滅せよ
！抜刀！」

こうして孫権達も賊がいる場所へと進んでいったのであった。

冒頭へ戻り数時間が経過

「はあ、はあもう粗方倒したと思うけれど、思春は、大丈夫かしら
？」

ふと回りを見渡した孫権が、息をついた瞬間後ろから影が、

「！？」

後ろを振り向くと其処には、剣を振りかざした賊が

(やばい・・・殺られる！)

その時孫権は、目をふさいでしまった
だがその瞬間ガキン、という音に阻まれる

そこにいたのは、思春ではなく、大太刀で防ぐ男の姿だった

「大丈夫か？立てるかい？」

口を動かしながら、指を男の前に指した。

「ああこいつか、ふん！」

男が、力を入れ剣を弾き相手を斬った

「これでいいな・・・改めて言うが立てるかい？」

「ええ・・・」

と孫権が男の手をとり立ち上がる

「ありがとうございます。貴方は？」

「それは、後にしようここの賊を、倒してからだ」

「ええわかったわ。ところでつり目のした。髪を束ねた褐色の女の子を見なかったかしら？」

「ああ見たぜ？というか、その子に頼まれてな、ついさっき来たときその子も君のような感じだったから助けて、二手に別れてきたの
さ」

「そう・・・わかったわ」

二人は、共に賊の首領の元へ、

その途中

「蓮華様！」

「思春！」

二人が、その場で、抱き合う

「よかった無事なのね」

「蓮華様も！」

「おいおい、時間がないだろうが、そういうのは後にしろ」

と、男が、諫める

「ごめんなさい。さあ行きましょう」

其処には、賊とその首領がいた。

首領は、此方を見ると切りかかってきた

首領が踏み出すが、これを大太刀にふさがれる

「ふうそんな単調で、どうするよ。全く」

と、防がれ斬られる

「うぐあこんなところで……」

首領は、事切れる

「うわあああ首領が殺られたああ！」

賊どもは、逃げるが、回りこまれる

「ひい！お前は、いつたいなんなんだ！」

「俺か？俺は、灰燼の蒼鬼だ！」

「ひい助けてくれえ」

「お前は、助けてと言った人に何をした？」

「・・・」

そう賊は、黙ると、数秒後に蒼鬼にただ切られていた

「よし、終わった。さて二人ともどうだ？大丈夫か？」

「ええ／ああ」

「そういえば聞いて無かったな名前」

「私は、姓は、孫名は、権字は仲謀真名は、蓮華だ」

「私は、姓は、甘名は、寧字は、興霸真名は、思春だ。宜しく頼む」

「俺はさつきも、言ったが、灰燼の蒼鬼だ宜しく」

蒼鬼と、姫達はであつたさてはてどじりなるのやら

「とじりるで真名つてなんだ？」

「.>」

どじりなるのやらー？

第五話「蒼鬼、姫達との邂逅を成す?との事」(後書き)

どうも、いかがでしたでしょうか?真名等の事は、次回にきちんと出来るだけ頑張りますので、名乗るだけで勘弁してください。これが、限度なんです。すいません。

では、行きなりですが、また次回お会い出来たらお会いしましょう。では、

第六話「蒼鬼、真名をの意味を知り、名を教えるとの事」(前書き)

今晚、作者こと、燼です。少し期間が空いてしまつてすみませんで
した。出来たら直ぐ投稿したかったのですが、いかんせん、お餅と
かがですね……

すみません

今度からは、出来るだけ早くするつもりなので、ではまたあとがきで

第六話「蒼鬼、真名をの意味を知り、名を教えるとの事」

「え？真名を知らないの？」

「ああ、俺の所では、そういう風習がなかったからな。」

「じゃあその名前は、本名じゃないんだろう？」

「ああ本名は、結城秀康という。なんで、本名言わなかったのかは、癖だ。」

「癖？本名を、言わないのが癖なの？」

「ああ、まあな何か町の人達が、灰燼の蒼鬼やら、アオ鬼とか、言うからな。めんどくさくなって、灰燼の蒼鬼と名乗ってるわけだ。後由来は、今は、二本も、持ってないが、二本の大太刀をふるい鬼神のごとく敵を倒すからだそうだ。」

「訳って、貴方ねえ・・・まあいいわ、何で今一つしかないのかとかは、聞かないわ。真名の事教えてあげる。」

「ああそうしてくれると嬉しい。」

「じゃ、説明するわよ？真名は、親から貰う大切なもので、自分自身、認めたり、しない限り、決して教えてはいけないもの、それが真名なの。」

「は？そんな大事なものを、簡単に教えて良いのかよ？」

「いいから、教えたのよ。私が、良いと。思春も、にたような感じでしょうけれど」

「はい。私も蓮華様が、おっしゃったように自分が、そう思い、そう感じたからこそ蒼鬼に私の真名を許したのです。」

と、思春が、蓮華に続いてそう告げる

「わかった。じゃあ俺は文句は、言わねえ宜しくな！蓮華！思春！俺のことは、思春のように蒼鬼でもなんでも構わねえから」

と思いつきりの笑顔で蓮華達に向けて、そう告げる

注：蒼鬼は、イケメンです。超がつくほどの

by 作者

「わ……わかったわ蒼鬼。よ……宜しくね（な、なに！？あの笑顔反則じゃないの！？）」

「り……了解した。よろしく頼む。（むう……少し顔が熱い……あいつの顔が、まともにみれん……）」

と、内心思ってたっしやる。お二人だが蒼鬼は、首を傾げる

しかし間髪いれずに蓮華が、

「あ！思春！日は！？」

その言葉に思春は、はっとしたのか、空を見上げると、

「まだ・・まだ大丈夫です。蓮華様、今から出れば、間に合います。」

と、思春は、告げる

「よし！わかったわ！ところで、蒼鬼貴方はどうするの？」

「んー出来たら連れていってくれねえか？
まあ無理にとは、言わんが」

「いいわよ？それだけの武があるのだし、
着いてきてくれるのなら構わないわ？まあ試験は、受けて貰うければ？」

「構わねえ、宜しく頼む。」

と蒼鬼は、受け答える。

「じゃ決まりね？あ、言っておいてなんだけど、姉様には、気おつけてね？」

と、蓮華が付け足す感じに、言う。

「なんでだ？てか、姉様って誰だ？」

と蒼鬼は、聞き返すが、

「試験の時には、分かるわよ」

と言い旅立つ準備を始める。

そして蒼鬼も、自分の準備にとりかかる。

さあ名を明かした蒼鬼。自分自身の事は、話さなかったが、何故なのだろうか!?
次回に続く!

第六話「蒼鬼、真名をの意味を知り、名を教えるとの事」(後書き)

如何でしたでしょうか？グダグダ感というか、性格変わりすぎだろとか、あるかと思いますが、いかんせん内容を知りませんけれども、好きな人達ですので、こんなかたちになっちゃいました。すいません。

なんかご指摘とかある方は、感想に、お書き下さい。出来るだけ反映しますので、

それでは、今回はこの辺で、
またー

第七話「蒼鬼、呉の姫たちと会い対すること」「（前書き）

また日が、開いてしまって、すいません。本当にすいません。何回かやったのですが、スマホじゃ落ちる、落ちるwwそれでやる気が・
・・OTZ

まあ続きです。見るに耐えないとおもいますがよろしく願いします。

第七話「蒼鬼、呉の姫たちと会い対するとのこと」

side:雪蓮

「はあい はじめまして性は、孫名は、策字は伯符よ。よろしくね」

「おい、雪蓮どっちを向いて、喋ってる？とつとつ頭がおかしくなったのかしら？」

「ぶーぶーおかしくなってないわよ。冥琳」

と、性は周。名はユ（字が出なかったためカタカナです、すいません。）字は公キン（これも字が出なかったT口Tすいません。）が、笑いながら孫策につっこんだ

「もう・・・ところで、ちょっとうるついて来るわね〜まだ蓮華もこないし」

「ちょっと待て、雪蓮。蓮華様が、こられるまでもう数時間も無い。それに将が、詰まんないからってふらふらしないで頂戴？周りが、しまらないでしょ？」

と周ユが孫策に注意を促す。

孫策がしぶしぶといった顔で

「分かったわよ。待ってるー大人しくしてますよー」
ここでちょうど、陸遜が、伝令にやってくる

「雪蓮様〜雪蓮様〜、東の方向に砂塵ありですよ。蓮華さまの旗

も見えます。流石蓮華様です。

時間ぴったりですよ。」

と感心した様子で陸遜はつぶやいていた。

その後ろで周ユと孫策は笑いあいながら、言葉を交わしていた

「そのきつちりというか、ちゃんとするという融通のきかなさそう
なところが、蓮華の珠に傷な部分よ

ね。」

と孫策がちょっと笑いながらではあるがふつつと息を漏らしながら
つぶやく。

しかしここで周ユが、

「そこが蓮華さまのいいところでもある。雪蓮も、少しは蓮華様を
見習って欲しいわ。」

ちよつと周ユを横目で見ながら孫策はつぶやく

「ええ。どういふことよ冥琳」

「まだこないからといってふらふらするようなどこかの誰かさんの
様にはなく。きちつとふらふらせ

ずきちつと、刻限に遅れずこれるようなところをだ。」

孫策は、まずいといった顔で

うう。と唸った

そのとき少しあせった感じで陸孫が、

「雪蓮様。雪蓮様。蓮華さまの軍の中に、見慣れない。青い鎧を
きた人が居ます。」

孫策が、すこし怒った風に言った。

「あら、蓮華は、ことあるごとに、私に注意するくせに自分は、そ

うするんだふくん」

だがここで周ユが、

「何を言うか、お前と違って、政務などをきちっとこなす。蓮華様だが、お前は違うだろうが、その分

そうしたってもかまわないはずだが？」

孫策が、うと言ってまずいというな雰囲気を出していた。

「ま・・まあとりあえず待ってましようか。もう少しで来るのだし。

」

「そうだな」

と言って周ユと孫策は、東の方向。砂塵が起きている部分を見つめていた

side:蓮華

「思春？もうそろそろ付きそろう？」
と蓮華が思春に伝える

「ええ、もう、旗が見えていますもうそろそろですよ？蓮華様」
と思春が言った

「ふう。しかし私も姉さまのやっていることにあまり口うるさく言えないわね。私だって姉様と似たようなことしてるんだから」

とちよつと呆れた感じで言った。

そこで思春はクスッと嘲笑して

「蓮華様は昔からああやはりこの方はやはり雪蓮の妹様なのだとお

孫策が、蓮華の肩を力強く持つて

「ほ……本当なの！？蓮華、あの人見知りか激しいあなたが……
本当なの！？」

蓮華が、少しおびえた感じで

「ええ……本当よ？」

孫策が蒼を睨みながら言う

「その青い鎧を着た。男！私と戦いなさい！」

蒼鬼がそこでポカーンとした顔で、

「はあ？」

周ユが蒼鬼の肩を持ちながら頭を抱え

「済まないが……戦ってやってくれ。ああなった孫策は止められない。」

蒼鬼が少し肩を落としながら周ユに聞く

「本当か？」

そして聞くと周ユが即効で

「マジだ」

と答えるそして蒼鬼は

「はあ……やれやれだ……」

とため息を吐きながら頭を垂れる

さてさてひょんなことから孫策と戦うことになつてどうなるのか！？

「やっつてらんねえ……」

どうなるのか!?

第七話「蒼鬼、呉の姫たちと会い対すること」(後書き)

さつて雪蓮との戦闘フラグ立ちました！

まあ蒼鬼チート仕様なんで大丈夫なんですけどねwwww

雪蓮も若干チートですが……

まあ心配すると言えば自分の文才ですまじd

では次もがんばりたいとおもいますではコレで〜

幕間「鬼が愛した人と、約束した人が蒼鬼のもとへ!？」(前書き)

どうも、こんばんは。今回はとある方々を出しました。読んだら多分分かります。

では、前書きは、この辺でー

幕間「鬼が愛した人と、約束した人が蒼鬼のもとへ!？」

蒼鬼が、逝き、蒼鬼が守った世界では、何十年という月日が、流れていた。

蒼鬼が、死に墓石が、置いてある所には、赤い大太刀を、大事そうに抱えている人物と墓石に花を添え両手を合わせている人物が、いた。周りには、大輪の花を咲かせた桜の木が多くある、ほんの隙間で

「十兵衛ちゃん。終わった？」

「うん。お初姉、アオ兄元気そうだ。」

と、少し、悲しみを顔に含ませながらも笑う。

「(こんな顔で、笑って・・・まだ吹っ切れてないのね)そう。よかったわ。」

「お初姉、その剣・・・」
と、少し驚きながら言う

「ええ十兵衛ちゃんの話しでは、全て、持っていったって聞いたけれども、また、あの場所に行ってみたの、そしたらこの剣(血染山河)が、刺さっていたの」

お初も、十兵衛と、同じように顔に、悲しみを含ませながらも笑いながら話していた

「（お初姉も、まだ・・・）そつか・・・じゃそろそろ行くか・・・」

だが、突然両者ともに、周りの空間のいろが、違うということに気がつく。

「幻魔!?!」

とお初が、叫ぶ

「そんな!?!幻魔は、もう居ないはず!?!」
と、叫びながらいう。

だが、そこから現れたのは、幻魔ではなく蒼鬼を、恋姫の世界に送った神だった

「ふう、蒼鬼が、忘れたという剣の力を追ってきたのは、いいがまさか近しき者に守られていたとはな」

二人は、この殺伐とした空間の中で、蒼鬼という名を聞くと、鬼気迫る勢いで詰め寄った

「貴方!?!今何て言ったの!?!蒼鬼?蒼鬼と言ったの!?!」

「なんで、お前が、アオ兄の事を知ってる。もうこの世には、居ないのに!?!」

十兵衛は、両目にイツパイの涙を浮かべたまま相手を睨んでいた。

此処で、神は、ああと言って

「当然だ、何せ死んだ蒼鬼を別の世界に、やったのが、俺だからな」

神は、当然といい。傲慢な態度を取りながら両者に向かい言った。
二人が、驚愕していると、

続けて神が

「蒼鬼が、その剣を欲してるんでね。渡してくれないか？」

神が、少し殺気を纏わせながら聞いた。

両者は、一つ聞いた。それは、蒼鬼のもとへ行けるか？ということ
それについて神は、少し考える素振りをして

「ああ構わない。いいぞ？（それに面白そうだしな）。蒼鬼が、い
る場所がかまわんな？」

二人は、大いに、喜びそして、行く準備をしに行こうとする

と、神がああとまた言い

「そのまま構わん。武器とかは、そのままでもいいから、行ってこ
い。早く会いたいんだらう？愛しの彼奴に」

二人は、顔を赤らめながら叫ぶ

「な・・・何言ってるんだ／何言ってるのよ！」

叫んだあと二人は、心の中で思う

（負けない！）

神は、呆れたように

「あー早くしやがれ、蒼鬼が、叩き斬られても、構わないのか？」

「どういうこと！？」

とお初が、聞く

「あーあいつがな、ちょっと奴さんの、嫉妬心を刺激しちゃってね？それで、戦う羽目になってんだよ」

「分かったらさっさとしろ、面倒なんだよ、色々と」

と神は、だるそうに言った

「わかった／わかったわよ」

と、二人は、力強く言った

「よし二人とも、その剣離すなよ？」

神が、言ったあと二人は、力強く血染山河を握りしめ、蒼鬼のことを思い浮かべた

「蒼鬼／ア才兄」

神の回りが明るく光り、光が濃くなると、其処には、誰も、居なくなっていた。

幕間「鬼が愛した人と、約束した人が蒼鬼のもとへ!？」（後書き）

ども、作者の燼です。今回は十兵衛とお初をださせていただきました。本編に、というか、蒼鬼に、めっちゃ絡ませますwあと、血染山河ですが、原作では、二本とも持つていつてるのですが、二人を絡ますがために二本とも置いていったことに、しました。山河慟哭は、お初がくるまえに、蒼鬼が、回収しましたので、一本しか刺さって無かったわけです。

嫌だったらすいません。嫌だったらまわれ右でお願いいたします。すいません。では、また！。

台八話「決戦！？蒼鬼、呉王と戦い仲間と再会すること part 1」(前書

こんばんわ。作者の燼です。今回はできるだけ。タイトル道理にしたいなおもっています。でははじめます。

台八話「決戦！？蒼鬼、呉王と戦い仲間と再会すること part 1」

「どうして、こうなった……」

蒼鬼が、つぶやいていると、蓮華が、近くにきて謝った

「ごめんなさい。姉さまが無茶を言ってしまって……それに姉さまがああなるのは私のせいなの」

ん？と蒼鬼は首をかしげて聞こうとするが、蓮華は、何かいいにくそうにしているため、隣にいた思春に聞いてみた。そしたらああと
言って、

「蓮華様がそういうことを渋っているのはだな……蓮華様が、先ほど蓮華様の方を強く握り締められていたかたな？その方には、蓮華様が、真名を教えなかつたんだよ。十歳になるまで、
と言っていた、思春も顔を少し歪めながら言っていた。

「ん？確かにその真名は、大事なものだろう？身内とはいえ、教えるのを渋るのは当然だともうが、」

思春が、言おうとして動くが蓮華が、手で制し、話を語り始める。
周りがこれからどういうことが行われるかと言つことで騒いでいる
中で……

「私は、姉さまでもないし、姉さまにもなれはしない。それに、こんな世の中、戦いが続くそんな世の中でしょ？私が、ここを継ぐことなく、外に出て行って敵となってしまうたら？孫と権という性と名をすてて、字だけ生きたとしたらどうなるのでしょうか……そ

れをふと十歳になる前九歳のときに考えてしまったの、無駄に頭がよかったから、それでふと思ってしまったの、一応九歳になったときには、私の真名「蓮華」と言う真名は、もうもらっていたの母様から、けれどさっき言ったように考えてしまってもし姉さまに教えて、もし鈍らないとは惑われないとは思うけれど、教えてしまつて惑わせたらそれこそいやじゃない？だから・・・だからね九歳になつてから真名をもらつてからの一年間は、教えなかったの、それをまあいきなり出てきた蒼鬼に教えてしまったものだから、こつなつちやつたのね・・・だからごめんなさい。」

と騒ぎが続くなか重苦しい空気が周りを包むが、それを蒼鬼が聞く言葉によつて変化させる。

「そつか、ふたつ聞くぞ？それを思つて後悔したか？それをあの姉ちゃんに話したか？」

それを蓮華は、一変の迷いも無く

「後悔はしていないわ、それも話したわ。それで、その答えは私が今ここに居ると言うことが証拠よ」

蒼鬼は、笑いながら言う。

「そつか、ならいいじゃねえか、蓮華。お前には、お前の考えがあつただしそれをきつちり姉に話して、理解し合つてここに居るんだから、それでいいじゃねえか。まあしかしそれでこうなるか・・・愛されてる上に可愛いねえ」

その可愛いねえと言う言葉を聞いた瞬間蓮華と思春はジトーつと睨むが隣に居た。周工は、笑う

「はははは！雪蓮のそれを可愛いと言うか！お前は、ふふふ面白い

自己紹介をしようか、それに私の真名も許そう。性は、周名は、ユ字は公キン、真名は冥琳だ。よろしく頼む。」

「俺の名は、通り名が灰燼の蒼鬼、名前が結城秀康だ。呼び方は何でもいい。宜しく」

「よし、じゃあ私は、秀康と呼ばせてもらおう。」
こう言った冥琳に、蒼鬼は、目を見開いた

「何かいけないことでも言っただろうか……；；）大丈夫か？
秀康？」

蒼鬼は、ああと言いながら

「いや昔そういつてくれた人（女性）がいてな。まさか同じような
感じで言われるとは、思ってたなくて、」といった

周ユは、そうかと言ったその瞬間に蒼鬼の隣が光りだす。

その光はやがて大きくなり目を覆うほどだった。
数秒後それが消えその光のなかから出てきたのは、血染山河の柄を
握り締めた十兵衛とお初の姿だった。

な！？という声を上げる蒼鬼、そしてそこに向かって走ってゆく。

「お初！十兵衛！」

と叫ぶと二人は気づき声の主を見るとお初は泣き崩れ、十兵衛は、
蒼鬼に抱きついた。

「な！なんで二人とも！？」

泣いて枯れた声で、十兵衛は、

「神がつてやつが来て、それでアオ兄の剣を持って帰りたいって言うから代わりに俺たちも連れて行っていったら……」

「そうか……よかつた二人とも、ロベルトと天海は!？」

「ロベルトはまだ祖国の幻魔を倒すので忙しくて、天海はどこいったのか分からない。それで二人で

アオ兄の墓参りしてたらあいつがきたのさ……」

「そうか、ちょっと待っててくれないか？あの糞神から聞いたのなら分かると思うが、ちょっと今いざこざがあつてな……」

「ああ聞いてるよそれよりもお初姉のところ」

ああといいそのままあるていく、蒼鬼つくとお初と言葉を交わす。

「お初……少し待っててくれ、ちょっと倒すやつがいるからよ……
・終わったら話いっぱい聞かせてくれ俺が逝ったあの後からの話とかを……」

お初は口を押さえ涙を拭きながら首を動かして答えた。

台八話「決戦！？蒼鬼、呉王と戦い仲間と再会することとpart1」(後書

すいません。今回のお話は二部構成にしてみました次にpart2
を書くつもりです。

すいません。できるだけだけ蒼鬼とお初たちのを優先したかったものです
から次こそは、戦闘にします。ではコレで〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9051z/>

真・恋姫無双～黒き鬼と姫達との邂逅～

2012年1月12日00時58分発行